清流 復活へ 大和川の挑戦 ③

「日本一汚い川」からの脱却

公共管への接続が鍵

家庭からの生活排水。そのまま川へ流せば水質汚濁が著しいのは言うまでもなく、きれいに処理することが必要だ。処理には下水道など集合処理施設と個別処理施設である浄化槽（合併）がある。

下水道は、家庭の台所や水洗トイレ、風呂場などから出る汚水を集めて流す汚水管と、汚水を処理する終末処理場、ポンプ場から成り立っている。

処理場では、微生物などの働きによって汚水中の有機物を分解し、きれいになった処理水を消毒して放流する。

下水道の普及とともに大和川の水質は年々改善している。流域の下水道普及率が11―13％程度だった昭和五十二、五十三年ごろは生物化学的酸素要求量（BOD）が19以上を記録。ところが、下水道普及率74・8％の平成十九年にはBODが4・7にまで改善されている。

下水道には分流式と合流式がある。分流式は、家庭や事業所から発生した汚水は排水専用の管きょを通じて処理場へ送られ、雨は雨水専用の管きょを通じて河川に放流されるのに対して、合流式は同一の管きょで送る。

現在は分流式が主流。合流式は雨天時には処理しきれない汚水が公共用水域に放流されてしまい問題となる。古くに下水道に着手した都市で多く採用され、その改善対策が進められている。

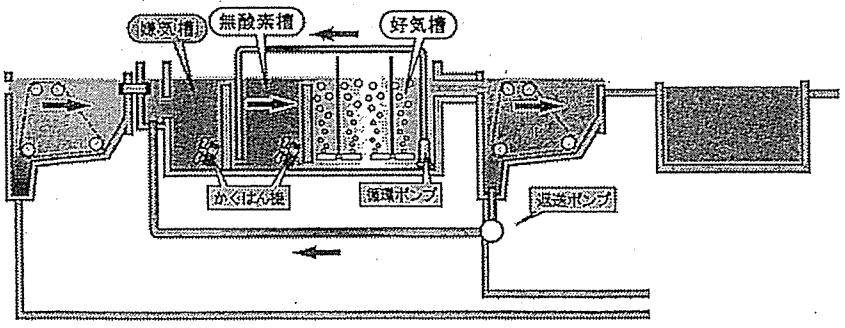
一方、公共下水道管の工事が完了しても、各家庭の排水管と接続しないと下水道としての効果を発揮できないが、接続率は87・4％にとどまる。

費用負担の事情などにより接続していない人が約十一万五千人もいる。接続できれば大和川の水質改善の一助となる。

県下水道課は「流域市町村には接続費用の貸付制度もあるので、利用してもらいたい」と話している。大和川の水質改善のためにも接続率のアップが求められる。

＝毎月1回、下旬に掲載＝

下水道のしくみ



下水処理場の仕組み

当記事を奈良新聞社に無断転載することを禁じます。

H21年 3月30日(月) 新聞
朝・夕 奈良 版